

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 13 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520504

研究課題名（和文） 英語における結果表現の語彙・構文論的分析

研究課題名（英文） A lexica-constructional approach to resultatives in English

研究代表者

岩田彩志 (IWATA SEIZI)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：50232682

研究成果の概要（和文）：Goldberg (1995)の主張とは異なり、結果表現は基体となる動詞が他動詞か自動詞かにより区別されるべきである。前者では動詞に後続する名詞句が force の受け手であるが、後者ではそうになっていない。また、結果表現は様々な意義がネットワーク構造を成していることも判明した。この事実を捉えるためには、抽象度の低いレベルの構文により結果表現を取り扱うべきである。

研究成果の概要（英文）：Contrary to Goldberg (1995), resultatives based on transitive verbs should be distinguished from those based on intransitive verbs, in that the post-verbal NP is necessarily a force-recipient in the former but not in the latter. Furthermore, resultatives form polysemy networks, in which various senses are extended from the central sense. This suggests that resultatives are to be approached in terms of lower-level constructions.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：項構造、語彙意味論、構文理論、語彙・構文論的アプローチ

1. 研究開始当初の背景

近年の語彙意味論において Goldberg (1995) の提案している Construction Grammar (構文文法) による分析が大きな流れとなっている。しかし Goldberg の分析では構文の役割を強調するあまり、動詞自体の役割が過小評価されているきらいがある。Jackendoff (1990), Pinker (1989), Levin

& Rappaport Hovav (1995) といった生成理論内での語彙意味論研究の知見をもうまく取り込めるように、理論を修正・発展させていく必要がある。

研究代表者は、このような観点から研究を進めてきた結果、従来の生成語彙意味論的分析とも、Goldberg 流の構文分析とも違う、語彙・構文論的分析という独自の理論

を展開するに至っている。その成果は、隔年で開催されている国際構文理論学会で発表されている(2001年(パークレー、アメリカ合衆国)、2002年(ヘルシンキ、フィンランド)、2004年(マルセイユ、フランス)、2006年(東京、日本)、2008年(テキサス・オースティン、アメリカ合衆国)。また Linguistics (2002), English Language and Linguistics (2004), Cognitive Linguistics (2005), Language Sciences (2006)といった海外の一流の学術雑誌にも論文が掲載され、海外の学者にも高く評価されている。

このような独自の理論の妥当性をさらに検証し、理論としてさらに発展させていくために、Goldberg 流の分析で上手く説明出来るとされている結果表現を次なる研究対象として選んだ。

2. 研究の目的

Goldberg (1995)の Construction Grammar (構文文法)による分析は英語の結果表現 (He hammered the metal flat/He laughed himself silly) に対して妥当であるとされてきたが、いくつか検討を要する点がある。特に動詞と構文との関係をどのように捉えて表示するか、結果表現は1つのメカニズムだけで説明しきれるか、等の問題を解決する必要がある。動詞の意味をもっと考慮に入れた代案として展開されてきた語彙・構文論的分析により、これらの問題を解決して包括的な結果表現の説明理論を構築することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

結果表現は人気が高い現象であり、海外だけでなく国内でも、質の高い研究が発表され続けている。そのため、先行研究 (Levin & Rappaport Hovav 1995, 2005, Goldberg 1995, Goldberg & Jackendoff 2004, Washio 1997, Boas 2003) を詳細に検討することは勿論のこと、新たに発表される内外の研究にも絶えず目を通した。そしてこれらの文献で挙げられている例を基にして、コーパスやwebを活用して、どのようなタイプのデータがあるか、どのようなタイプが頻繁に生じるか、を徹底的に調査した。同時に、収集したデータに対してこれまで明らかになった語彙・構文論的アプローチの知見をもとにその理論的意味合いを明らかにしながら整理していく作業を行なった。

4. 研究成果

(1) 他動詞に基づく結果表現と自動詞に基づく結果表現の違い

Goldberg (1995)は、He hammered the metal flat (He hammered the metal)のように動詞がもともと目的語を取れるタイプの結果表現と、He laughed himself silly (*He laughed himself)のように動詞が目的語を取れないタイプとを統一的に説明できるとしている。しかし他動詞に基づく結果表現と自動詞に基づく結果表現を詳しく調べてみると、両者はやはり区別すべきことが判明した。

①他動詞に基づく結果表現では、目的語位置に生じる物体は必ず force-recipient でなければならない。これは下位範疇化された目的語を伴う場合 (wipe the table clean /wipe the table) のみならず、伴わない場合 (wipe the crumbs off the table/*wipe the crumbs) でもそうである。

なお、下位範疇化されない目的語であっても force-recipient でなければならない、というのは全く新しい発見である。下位範疇化されない目的語でも許される場合 (He wiped the crumbs off the table) と許されない場合 (*The bears frightened the campground empty) があることが知られているが (Carrier & Randall 1992)、両者の違いはこれまで説明されていなかった。下位範疇化されない目的語であっても force-recipient でなければならない、という知見を基にすれば、この両者の違いは綺麗に説明できる。

②一方、自動詞に基づく結果表現では、目的語位置に生じる物体は force-recipient になっていない。例えば He laughed head off において、頭に force を伝達しているとは考えづらい。しかし、「大笑いすると head が揺れるために his head off という結果状態が引き起こされる」と考えれば、この結果表現にも納得がいく。つまり body-internal motion により結果状態が引き起こされている。基体が自動詞であるため、本来的に他者への force transmission を行なわない筈であるが、自分自身の身体部位への force dynamics に基づいて、結果表現を形成していることになる。

(2) 自動詞に基づく結果表現と多義ネットワーク

自動詞に基づく結果表現をさらに詳しく調べていくと、単一の構文では記述しきれないことが判明した。上述のように、He laughed head off は「大笑いすると head が激しく揺れて、his head off という結果状態が引き起こされる」という

発想に基づいている。ところが厳密にはこの説明をそのままあてはめられない実例が多数存在する。これらの例は、*laugh one's head off* のように *force dynamics* に基づく用法を基にした拡張用法であると考えたと説明が付く。まず「(大笑いして) 頭を激しく動かす」→「(たくさん喋って) 頭を激しく動かす」という類推から、*talk one's head off* が可能になる。次に「(大笑いして) 頭を激しく動かす」→「頭を激しく動かす」という類推から *eat one's head off* が可能になる。さらに「頭を激しく動かす」→「頭を使う」から *wonder one's head off* が、「頭を激しく動かす」→「大声を出す」から *The gale shouts its head off* が可能になる。最後に、*The giant pansies bloom their heads off in spring* という無生物主語を伴う実例が存在するのだが、この例では「花が大きく咲く」様が、「人間が頭を激しく動かす」様と、外観上似ているために関連づけられると考えられる。つまり、視覚に基づくメタファーにより中心義と結び付いている。

これらをまとめると、要するに *V one's head off* という結果表現は、多義ネットワークを成していることになる。

他の身体部位に関する結果表現 (*V one's eyes out/V one's heart out/V one's socks off*) を調べてみると、同じことが当てはまることが分かった。*V one's eyes out* は、*She cried her eyes out* のように「泣く」ことを表わす動詞が主に生じる。これは、「大泣きして涙が大量に目から流れ出し、眼球を押し出してしまふ」という発想に基づく結果表現である。*V one's heart out* は、*We sang our hearts out* のように「一生懸命に体を動かす動作をした結果、心臓が体外へ飛び出してしまふ」という発想に基づく結果表現である。そして *V one's socks off* は *She laughed her socks off* のように、「(大笑いして) 足をバタバタと強く蹴り、その結果、はいていた靴が取れてしまふ」という発想に基づく結果表現である。しかし、コーパスを調べてみると、これらの *force dynamics* に必ずしも合致しないような動詞がこれらの結果表現に生じている例が多数見つかる。これらは、*force dynamics* に基づく表現を中心として、そこからの拡張用法であると考えることにより、無理なく説明が出来る。

このように、身体部位に関する結果表現は、いずれも語彙ネットワークを成していることが判明した。

(3) 他動詞に基づく結果表現と多義ネッ

トワーク

他動詞に基づく結果表現は、自動詞に基づく結果表現と異なり、動詞に内在的な *force* により結果状態が引き起こされており、多義ネットワークが生じる必然性は少ないように思える。しかし他動詞に基づく結果表現の中にも、多義ネットワークを成すものが存在することが判明した。

He frightened the life out of me (彼は私をビクビクさせた) は、他動詞 *frighten* に基づく結果表現だが、目的語位置に下位範疇化されていない *the life* が生じている。この下位範疇化されていない目的語が、*frighten* による *force* を受けているかという点、どうもそうとは思われない。このタイプの表現は誇張的意味で使われるために、一般的な原理が及ばない例外的なイディオム表現のようにも思えるし、実際に研究社の間でも単なる誇張表現として片付けられる傾向にあった。

ところが実は、*He frightened the life out of me* は *He beat the hell out of me* (彼は私をもの凄く殴った) と同じタイプの結果表現である。そして *He beat the hell out of me* は、実は *She squeezed the juice out of a lemon* のような結果表現と平行しており、「外から強い力を加えることにより、容器の内容物が外に押し出される」という *force dynamics* に基づいた使役を基盤としている。この使役関係を基にして *He beat the hell out of me* は多義ネットワークを成しており、その一部にあたるのが *He frightened the life out of me* のような表現である。

つまり、*force-dynamics* に基づく通常の結果表現 (*She squeezed the juice out of a lemon*) を下敷きとした、メタファー的拡張がかかった構文なのである。

以上述べたように、結果表現は自動詞に基づくものでも他動詞に基づくものでも、多義ネットワークを成すことを明らかにすることが出来た。これはつまり、結果表現も語彙項目と同じように長期記憶に蓄えられていることを意味する。使用依拠 (*usage-based*) モデルの考え方を突きすすめれば、これは寧ろ当然のことであり、語彙・構文論的アプローチの妥当性を裏付けてくれる。しかし *Goldberg* をはじめとして、多くの学者が使用依拠 (*usage-based*) モデルの見方を採用していると言いつつも、この事実とは相いれない主張をしてきている。この発見は、従来の結果表現に対する見方に根本的な修正を迫るものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[学会発表] (計6件)

- ① IWATA, Seizi “Means or enablement? Another look at the *way* construction” Seventh International Conference on Construction Grammar. 平成24年8月10日 Hankuk University of Foreign Studies. South Korea.
- ② 岩田彩志 「結果表現において動詞に後続する名詞句が果たす役割」第84回日本英文学会シンポジウム (講師) 『結果表現をめぐる』 平成24年5月27日 専修大学生田キャンパス
- ③ IWATA, Seizi “*He laughed his head off*: A lexical-constructional account ” Fourth International Conference on the Linguistics of Contemporary English. 平成23年7月22日 Osnabrueck University. Germany.
- ④ 岩田彩志 「一般化はどのように捉えるべきか?—spreadの所格交替を巡って—」日本英文学会関西支部第5回大会シンポジウム (講師) 『構文文法の現在と未来』 平成22年12月18日 大阪市立大学
- ⑤ IWATA, Seizi “Why can we say ‘*Bob shot him to death*’ but not ‘**Bob shot him into death*’ ? ” Sixth International Conference on Construction Grammar. 平成22年9月4日 Charles University. Czech Republic.
- ⑥ IWATA, Seizi “How to accommodate two types of resultatives: A lexical-constructional account” ELSJ Third International Spring Forum, Tutorial lecture. 平成22年4月24日 Aoyama Gakuin University (Aoyama Campus)

[図書] (計1件)

- ① 岩田彩志 『英語の仕組みと文法のからくり—語彙・構文アプローチ—』 平成24年10月 開拓社 175頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田 彩志 (IWATA SEIZI)
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 50232682

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし